# 水の声、江戸から聞こえますか

北区立王子第二小学校　四年一組
佐藤（さとう）　せり花（せりか）

「玉川上水の水、飲んでみたかったなあ。」

社会の「水はどこから」というじゅ業で、東京の水道水について調べました。東京の水は、奥多摩町から山梨県に広がる水源林から生まれた水がダム、多摩川を流れて取水せき、浄水場、配水管を通って私たちの家に届きます。でも、私の家で使われる水は、荒川から取水して三園浄水場を通って送られてきたものだそうです。ああ、多摩川じゃないんだ。

昔から荒川の水が私の家まで来ていたのか知りたくて、水道歴史館に行きました。すると、江戸時代は多摩川上流の羽村取水せきから引き入れた玉川上水が四谷大木戸まで運ばれていて、私の家の近くまでは玉川上水から分水した千川上水が流れていました。もし昔に私がこの場所に住んでいたら、玉川上水の水が飲めたのかと思うと急に胸が高まりまし

た。目をとじるとサラサラと水が流れる音が聞こえるような気がしました。のどがかわいていた私の頭の中は、水源林から流れ出る水のことばかり。どうしても玉川上水を自分の目で見たくて、羽村取水せきに行ってみると、水が川の水とは思えないほどきれいで、多摩川に足を入れると夏なのにとても冷たくておどろきました。私のご先祖様は、まだ飛鳥山の近くにキツネがいたころ、こんな多摩川の水で産湯をわかしてつかったのかなあ。

社会の宿題で、「わたしの街のとっておき」を調べた時に、昔は今のような機械がなかったから、水は高い所から低い地いきに流すしかなくて近くの隅田川の水を引けなかったこと、さらに隅田川は東京湾からの潮の流れで海水もまざるから使えなかったことを知りました。水がないと農業もできないから、川の上流と下流の村で争いもひんぱんに起こったと北区の本にもありました。こんなに雨もふるし海もある日本なのに、明治初期までは水

の争いがたえなかった。なんて。

SDGSの目標の一つである「安全できれいな水とトイレを世界中に」という課題は、日本でも争いごとの原因だったのを考えても解決はかん単ではありません。水道管や浄水場を作るだけでは安全できれいな水が手に入らないからです。いつもダムを満杯にしたくても、大雨の時に困るから夏は多く水をためられないそうです。また、世界の水に困る地域に陸続きなら水を送れるけど、海をこえて送ることはできません。以前、天皇陛下が「水問題の大切さへの対応も国際社会が取り組むべき重要な課題です」と国際会議で発言されたそうです。日本はふた雨を水源林できれいにして、ダムでは季節に合わせて水を貯めて、浄水場では高度浄水処理をして蛇口まで水を届ける技術があります。機械や薬品の技術も発達しているけど、東京では玉川上水のころに水番人がしていたように、今も多くの人が水を守るため365

日24時間働いています。他の国に技術を提供してもうまくいかないのは、人や技術を管理する仕組みが長期間保たれないからと父から聞きました。日本や東京ができることは、水を守り続けるという使命感を世界に広げることだと私は思います。

「わたしたちの水道」でも、最後に「世界の水はどうなっているの？」という問いで終わっています。世界中の水の問題の解決は簡単ではないけど、私が東京の水を学んでワクワクした気持ちを忘れずに、勉強を続けたいと思いました。江戸から現在まで水が流れてきた道は、人々が生きたあかしそのものです。千川上水の流れていた道を通ると、玉川兄弟や水源林を管理してくれてきた人達に、「あなたのいる未来も、水を大切にしていますか？」と問われている気がします。

もしいつか、私の子どもに「水はどこから」と問われたら胸をはって答えたいです。

今も昔も水は母なる川、多摩川から、と。